



共感覚者の脳の働きを画像で説明する長田教授（兵庫県三田市の関西学院大学で）＝大西健次撮影

気持ちよさ物差し追究

くつろぎを感じる照明、身につけて心地よい肌着……。「もの」が充足し、人々の関心が生活の「質」に向かう現代。物づくりに重視されるようになってくるのが、人の「感性」だ。

「好き」「嫌い」「気持ちいい」などの主観、感覚は、どんな刺激でどう動くのか。様々な条件でデータを集めて解析、傾向をつかみ、デザイン・製品設計に役立つ客観的な「物差し」をつくること。これが、長田典

楽しい学問

感性情報学

子教授(51)が取り組む感性情報学だ。

元々は民間企業で働く検査装置のエンジニアだった。真珠の色あいを検査する装置を開発することになった時、自分にはどれも同じに見える真珠の微妙な色や輝きの違いを、鑑定士たちが識別する様子に驚いた。「最後は感性です」。そう言われ、「何か科学的な根拠があるはず」と考えたのが、研究にのめり込むきっかけだったという。

研究室では、脳科学からのアプローチに挑んでいる。音に色を感じる「共感覚」の持ち主は、脳の活動部位を画像表示する装置で調べると、音の刺激に対し、目を閉じていても色を感じる部分が発動していることがわかる。共感覚者を対象に、調の異なる音楽を聴かせたところ、音楽によって感じる色、快不快は、ほぼ共通していた。

さらに、人気のCMを分析すると、映像の色調と音楽の組み合わせは、共感覚者が実験で「快適」と答えたものと同じパターンが随所に見られた。例えば、飲料水のCMでは、変ホ長調や変イ長調などのフラット系の音楽に、青や黄色を組み合わせる傾向が強かった。共感覚者に限らず、快適と感じる音楽と色調の組み合わせには法則性があることがわかったという。

感性の研究は、約25年前に日本で始まり、今では「Kansei」が世界共通語だ。長田教授は「人の感じ方を大切にする価値観が世界に広がり、研究の追い風になっている。快適性、使いやすさを重視した環境づくりにつなげ、人々の生活がより楽しく豊かなものになるよう、貢献したい」と意欲を燃やす。